

韓・日男性作家の作品に表れている美学的な死 (I)*

－ 谷崎潤一郎と金東仁の作品を中心に－

吉美顕**
goldmountian@hanmail.net

<目次>

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 3. 金東仁文学における「死」の意味 |
| 2. 谷崎文学に現れている美学的な死 | 3.1 初期作品に現れている嫉妬による死の招来 |
| 2.1 「金色の死」における死による中性美の表出 | 3.2 「狂炎ソナタ」における悪魔的な死 |
| 2.2 「金色の死」－芸術の天国 | 4. 終わりに |

主題語: 美学(Aesthetics)、中性美(Neutral beauty)、刹那(Moment-like beauty)、葛藤(Discord)、貧困(Poor)、狂暴的な死(Furious death)、嫉妬(Jealousy)

1. はじめに

金東仁は、1914年から1919年まで日本に留学し、1919年に雑誌「創造」を東京で創刊した。東仁文学の研究において看過できない点は、外国文学との影響が挙げられる。特に東仁が日本で文学活動を開始したという点と関連して、究明されるべき多くの問題が残っている。金東仁の場合、日本の自然主義文学と反自然主義文学、つまり、唯美主義文学の双方から影響を受けているために、日本文学からの影響は複雑とは言える。金東仁の作品には日本の唯美主義からの影響がより強く現れていることは確かである。それで東仁と日本の作家との比較は唯美主義という視点が多く、その中で日本の唯美主義代表作家である谷崎潤一郎との比較研究が主となっている。従来の東仁文学に関する比較文学的研究は、東仁の「狂画師」(「中外日報」1930)とオスカー・ワイルドの「ドリアン・グレイの肖像」(The Picture of Dorian Gray, 1891)¹⁾ないしは谷崎潤一郎の「刺青」(第2次「新思潮」第3号、1910・11)との影響関係の考察がある。最近では谷崎潤一郎文学と金東仁文学に現れている女人像と夏目漱石

* この論文は、2014年度の日本住友財団の後援による研究の成果をまとめたものである。

** 又松大学 Global Dual Degree学府日本専攻兼任教授

1) 金春美(1985)『金東仁研究』高大民族文化研究所、pp.97-179参照。

文学における結婚観についての研究が進んでいる²⁾。このような先行論文は、韓日唯美主義の影響関係による美学の変遷を中心に論じており、これを通じて谷崎と金東仁は美学の表出のために、様々な媒介を使っていることが分かる。その媒介は、女性の身体(白い足、顔)、火、母、死などである。

谷崎は初期には女体美を用い、「美しい者は強者であり、醜い者は弱者である」³⁾という強者としての美を描写した。ところが、彼は中期に入ってから美の追求のために死という要素を加える。その死の世界がよく現れているのは、「金色の死」(『東京朝日新聞』1914・12・4-7)である。「金色の死」(で岡村は自分自身の体、つまり生きている体で芸術の表出を求めた挙句、死んでしまう。

金東仁の場合、初期の作品には当時の社会の反映、儒教的な要素、嫉妬と貧乏による葛藤からの死が描かれているが、中期の作品には芸術の誕生のためなら殺人をも辞さないという狂暴的な死や退廃的な死が現れている。このように両作家の文学作品における美学の影響関係があるにもかかわらず⁴⁾死による美学の描写は異なる点があることが分かる。

そこで本稿では金東仁文学と谷崎文学に現れている死の意味を把握することで、韓・日の男性作家の描く死における美学の要諦の相違点、ならびに共通点を「金色の死」と「狂炎ソナタ」を中心に検討してみたい。

2. 谷崎文学に現れている美学的な死

2.1 「金色の死」における死による中性美の表出

初期に女体美による強者としての美を作り出した谷崎は大正期に入り、女性の体ではなく、男性の体を利用して美の世界を求めている。「金色の死」での「人間の肉体を美にする」

2) ① 吉美頭(1999)「谷崎潤一郎文学の韓国における受容(Ⅰ)―「刺青」と金東仁の「狂炎ソナタ」」『COMPARATIO』Vol.3、九州大学大学院文化研究科比較文化研究会、pp.28-44

② 吉美頭(2000)「谷崎潤一郎文学の韓国における受容(Ⅱ)―谷崎の「刺青」「春琴抄」と金東仁の「狂画師」の女人像をめぐって」『COMPARATIO』Vol.4、九州大学大学院文化研究科比較文化研究会、pp.1-12

③ 吉美頭(2006)「李光朱「無情」における結婚観研究―漱石の「三四郎」における恋愛観の比較をめぐって」『COMPARATIO』Vol.10、九州大学大学院比較社会文化研究科、pp.1-10

3) 谷崎潤一郎(1981)「刺青」『谷崎潤一郎全集』第一巻、中央公論社、p.63

4) 金春美(1985)『金東仁研究』高大民族文化研究所、pp.977-979 参照。

という谷崎の思想は初期の作品「刺青」とは同一性を持っているが、男性の体による女性美つまり、谷崎は岡村の体と死を通して中性美を描写しようとした。そこで岡村の死を辿る必要がある。それは、岡村の死を探っていけば谷崎が求めた中性美が分かるからである。

岡村は、自分の財産を使って美のパラダイスを作ろうとする。岡村は美だけを追求する。それも生きている人間の肉体の美なのである。岡村は、芸術は、「人間の肉体美から始まる」という芸術の観念をもっていた。この小説は、語り手「私」が少年時代からの親友だった岡村の短かった生涯を物語るという形式を取っている。

莫大な遺産を受け継いだ岡村は「富による美の実現」をはたすため、彼は本を読んだり、運動場で鉄棒や平行棒に親しんで体を鍛えた。その結果、彼の体格には、変化が現れる。

子供の時分に小柄であつた彼の肉体は、十三四の歳からめきめきと発達して来て、筋骨の逞しい、身の丈の高い、優雅と壮健とを兼ね備へた青年になつて居ました。彼の髪の毛は鬢を冠つたやうに黒く、彼の肌膚はいつも真白で日に焼けると云ふ事を知りませんでした。彼のスラリとした精悍な手足は、一見して身軽な運動に適して居る事を想はせました。

この文章からは「美の典型を収集する意志」が見え、そのような美を示される対象としては「肉体を持たない<美>のコンテクストでしかなく⁵⁾」い。この点において「金色の死」は「刺青」とは大きく異なっている。「刺青」は、女性の肉体美は自分が磨くのではなく、男性によって付与され、その男性を征服するという図式であり、「金色の死」では、女性と芸術家がほとんど登場せず、女性の肉体美ではなく、鍛えた男性の身体が美の象徴なのである。岡村は自分自身の体を美術品つまり、美的存在そのものにしたいと望んでいた。肉体美の表現のために、体育を重要視する岡村は機械体操をして、ギリシア的訓練と名付け、訓練を怠るのならば芸術家として資格もなく、また訓練を施さずして国には芸術が生まれないとさえ言う。

「私」と岡村それぞれの芸術論⁶⁾を話し合った二年後、「私」は「新人作家のうちでも将来有望な一人として目され」、岡村は「仏蘭西物の詩だの小説だの、それでなければ美術に関する書籍」を読んでいる。岡村は、「チャリネのやうな感じのする芸術を作りたい」と言いなが

5) 清水良典(1990)「金色と闇との間—谷崎潤一郎『金色の死』をめぐる—」『日本文学研究資料特集8 谷崎潤一郎物語りの方法』有精堂、p.91

6) そして「肉体よりも思想が第一だ。偉大なる思想がなければ、偉大なる芸術は生れないのだ」という考えをもっている「私」と「自分は富豪の一人息子だ。膨大な資産と、強壮な肉体と、優美な容貌と、若い年齢との完全な所有者だ」と言う岡村とは美に対する観点の差が見える。

ら、「最も卑しき芸術品は小説なり。次ぎは詩歌なり。絵画は詩より貴く、彫刻は絵画よりも貴く、演劇は彫刻よりも貴し。然して最も貴き芸術品は実に人間の肉体自身也。芸術は先づ自己の肉体を美にする事より始まる」と言う。その芸術論に沿って岡村は、27歳の年の春から「かねがね工案して居た彼独得の芸術の創作に」取りかかり、「絢爛なる芸術の天国」を作る。それは、富による理想の美と「自分の肉体を美」にするという芸術論の実践である。その裏付けは谷崎の手紙の中にある⁷⁾。この手紙を通して理解できるのは、谷崎は自分なりの特別な「芸術論」を述べるために努力したという点である。

2.2 「金色の死」－刹那的な死による美の表出

「芸術の天国」には、「千態万状を極めて山水の勝景に拠つて古今東西の様式の粹を粹めた幾棟の建築建物」があり、「彫刻物が点々として安置」され、「彫刻の多くは此れも古來の傑作を模倣したもので、仏像女神像は云ふ迄もなく、人間から野獣の類までも網羅」され、「ロダン」の彫刻もあり、「不思議にも其の偶像の男の顔は、特に彼が意匠に基いたと見えて岡村の容貌に生き写し」であった。このような「芸術の天国」が岡村が考えている「創造」の世界である。これで彼の「創造」の世界の生成が終わるのではなく、彼は旅行をしながら自分の理想の美、即ち「新しい形式の芸術」を作るため、全力を尽くす。

「私」が見たものの中で、非常に驚いたのは、「アングル(Jean Ingres, 1780-1867の『泉』の画面を模)したものである。この美女たちは「忽ち愛嬌のある大きな瞳をしばたいて、唇の際に微かな笑みを浮かべ」ており、「白晳の肌を持つた金髪碧眼の生き物」であった。森の殿堂を出た時、二つの生ける画面を見た。それは、「ギオルギオーのキナス」と「ルカス、クラナハ(Lukas Cranach, 1472-1553)のニムフ」であった。これが岡村が作った「創作の一つ」である。日が暮れて湯槽の所に行くが、そこも「悉く生きた人間ばかり」であった。そこにいる

7) 「人間の肉体」が芸術になれるということは明治の作品である「饒太郎」の中でも見られる。ところが、大正期よりは濃くないのである。「饒太郎」に次のように書かれている。「彼には小説よりも絵画の方が、絵画よりも彫刻の方が、彫刻よりも演劇の方が、演劇よりも舞台に現はれる俳優の肉体自身の方が、一層痛切な美観を齎すのである。」「饒太郎」(1981)『谷崎潤一郎全集』第1巻、中央公論社、p.359

8) 「しかし、此の五月に早川へ来てから、幸にも読書を始める機会と決心と根気とを得た。今は半分忘れた独逸語の勉強を七月以来継続して大分語学の力がついた。少しは何か読めるやうになつた。さうして、大分本も買い込んだ。(中略)一実は少く大規模に文学、哲学、科学の諸書を涉獵して、來年か再來年あたりまでに、僕独特の「芸術論」を書くつもりである。」谷崎精二(1987)『明治の日本橋・潤一郎の手紙』新樹社、p.115

美女達は「私」と岡村を見て、「両手を掲げて歓呼の声を放ち、銀の鱗を光らせながら汀の敷石に飛び上がって怪獣の足下に戯れる」のである。最後に行った所は、「地獄の池」であった。ここを渡らなければならないのであるが、岡村は「私の手を引いて一団の肉魂の上を踏んで」行った。渡ってみると、「其処には生ける人間を以て構成されたあらゆる芸術が」あり、一人の貴婦人が「四人の男を肉柱とした寝台に横たはつて居る有様」も見えた。岡村は広大な敷地内に「人間の肉体」を以て、「絢爛たる芸術の天国」を作ったのである。三島は谷崎の「金色の死」に描かれている「人工の楽園」の勝景と彫刻を羅列したことについて、次のように評価している。

それにしても「金色の死」の、美の理想郷の描写に入ると、とたんにこの小説は時代的制約にとらはれたものとなる。(中略)一世紀末も密教美術もおかまひなしの東西混淆は、当時の知識人の夢の混乱と様式の混乱を忠実にあらはし、ひいては、統一的様式を失った日本文化の醜さを露呈する。私はここの描写から、世界最高の俗悪美の展示場ともいふべき、香港のあのタイガー・バーム・ガーデンを想起したのである。日本のユイスマンスの美的生活の夢は、これほどまでに貧相であつた⁹⁾。

「私」が「芸術の天国」を見た「十日ばかり後、歓楽の絶頂に達した瞬間に彼は突然死んで」しまう。「私」が十日の間滞在した時、岡村は「服装を換へるだけでは飽足ら」なくなった。大勢の美男美女を選んで、「羅漢菩薩」の姿にさせたり、「悪鬼羅刹」に扮させたりした。それから岡村も「満身に金箔を塗抹して如來の尊容を現じ、其の俚酒を呷つて躍り狂つた」。「私」は「金色の俚氷の如く冷めたくなつて居る岡村の死骸」を発見する。「私」は、岡村の死骸について次のように述べている。

菩薩も羅漢も悪鬼も羅刹も、皆金色の死体の下に跪いて涙を流しました。其の光景は其のまま一幅の大涅槃像を形作つて、彼は死んでも猶肉体を捧げて自己の芸術の為めに努力するかと訝しまれました。私は此のくらい美しい人間の死体を見た事がありませんでした。(中略)此のくらい明るい、此のくらい荘嚴な、「悲哀」の陰影の少しも交らない人間の死を見た事がありませんでした。

9) 三島由紀夫(1970)「谷崎潤一郎」『作家論』中央公論社、p.72 このような三島由紀夫の話は、物として完成している美に対する批判である。「肉体と行為の美意識」という概念をもっていた三島もそれを実践する。三島は、ギリシア彫刻のような肉体を目指して、肉体鍛錬のために運動をしたり、モデルになったり、映画の俳優になったりする。岡村と三島は似ているところがあるが、岡村の方が肉体の美の実現をしたということ共通点が見える。

岡村の「死」についてはいろいろな見解がある。岡村の「死」は「自己否定」¹⁰⁾から出発しており、男が美の生成者となるためには観念性を捨てなければならない。岡村は「見る」という男性の官能の特質を放棄し、「美を存在せしめる」感覚的な源泉の「自己否定」を成したと言える。加えて岡村は「自身が芸術品と等しい肉体を体現する夢」を「現実可能に」しようとするためには死ぬしかなかったということかも知れない。これは「見られる」という「視覚的官能」に傾いている岡村の姿を象徴している。結局、岡村における「死」は、美への憧憬を際限なく引き出していく方法であり、「官能的創造の極致は自己の美的な死にしかない」¹¹⁾のであろう。

野口武彦も岡村の「死」を、「見る」「見られる」の立場をとって説明している¹²⁾。岡村のいう視覚的官能は、純粹に「見る」という機能ではなく、むしろより多く「見られる」ことの官能的快感にかかわっている。それは岡村が言っている「女性美を有する男性」の美の追求の結果である。岡村は男性の体に女性美を加えて、官能的な「見られる」立場を取ったのである¹³⁾。

岡村の「死」を自殺願望としてみる傾向もある。「見られる者の一体化として、行く手には自殺あるのみと、三島はあくまでも論理的に言い張る」¹⁴⁾のである。岡村のように自分の体で美の天国を作るという目的に捧げられた死というのであれば、必ずしも自殺と見做す必

-
- 10) 「自身が芸術品と等しい肉体を体現する夢は、少なくとも作家谷崎にとって、ありえないゆえに許される夢なのであって、それを現実に可能にしようとする衝動は、自己破壊の危険を孕んだ、まさに死の衝動だったといわなければならない。」清水良典(1990)「金色と闇との間—谷崎潤一郎『金色の死』をめぐる—」『日本文学研究資料特集8 谷崎潤一郎物語りの方法』有精堂、p.94
- 11) 「官能的創造の極致は自己の美的な達成は、一回的に一致する瞬間を迎える。「自分の意図した美が完成すると同時に自分の官能を停止せしめ、すなはちその金粉が皮膚呼吸を窒素させ、自分の内面にはもはや何もの存在しなくなり、肉体は他者にとつての対象に他ならなくなり、すなはち死体になった瞬間で」あった。「官能的創造の極致は自己の美的な死にしかない」という最終命題はこのような論理に支えられて成立する。
三島由紀夫(1970)「谷崎潤一郎」『作家論』中央公論社、pp.68-69
- 12) 岡村のエロティシズムの構造は一つの決定的な点で違っている。「ナルシスティックなエロスにあつては、三島が身をもって証明してみせたように、それが美の極限值に向って近づくとき、「見る」官能は純粹意識に還元され、「見られる」肉体は純粹存在に還元されるという二律背反的な過程が進行し、生身の人間において美が実現されることは純論理的には不可能である。」
野口武彦(1973)『谷崎潤一郎論』中央公論社、p.70
- 13) 「(男は)最高の行動を通してのみ客体化され得るが、それはおそらく死の瞬間であり、実際に見られなくても『見られる』擬製が許され、客体としての美が許されるのは、この瞬間だけなのである。」三島由紀夫(1975)「太陽と鉄」『三島由紀夫全集』第32巻、新潮社、p.99
- 14) 佐伯彰一は、三島由紀夫の自殺願望へ賛成しながら、岡村の自殺論について次のように述べている。「主人公の肉体の完璧な審美化の瞬間における自殺、つまり『金色の死』であり、生活の芸術化をナルシズムの方向へと論理的に押しつめてゆけば、クライマックスにおける自己破壊という以外に道はあり得ないはずである。」佐伯彰一(1979)『谷崎・芥川・三島物語芸術論』講談社、p.115

要はない。彼は「見られる」という世界を具現するため、体中に金箔を塗ったのだが、事故で死んだと理解する方がより妥当であろう。彼の死を自殺と見るならば、必ず自殺した痕跡と意図が存在するはずであるが、その痕跡はどこにもない。彼の死は自殺ではなく、瞬間的な美、すなわち刹那的な美の実現のために、死の方向に押し出されたと思われる。岡村は「肉体の完璧な」審美を演出して、箱根にユートピアを作り上げ、自ら「美的理想郷」の中で「金色の死」に至ったと言えよう。

彼の死体は「菩薩」のようであると描写されているように、彼の「死」は、中性美の象徴であるに相違ない。それを裏付けるのはその「菩薩」という言葉である。その言葉は中性美の発露の意味であり、岡村の「死」は中性美の具現であったのである。岡村は、肉体的な中性美、つまり男性を消すことによってそれを追求したのであるが、精神的な中性美で終わってしまった。

谷崎は「金色の死」を通して、男性の体に女性美を加えて「生ける人間の肉体」が芸術品になり得るという思想を実現しようとしたが、昇華できなかった。ただ、岡村の<金色の死>だけが残っているに過ぎない。岡村の中性美の具現は、その<金色の死>そのものであったと見られる¹⁵⁾。

3. 金東仁文学における「死」の意味

3.1 初期作品に現れている嫉妬による死の招来¹⁶⁾

尹弘老が東仁文学について、「東仁の作品は死の仕掛けをどこにでも設定している死の文学だと言えるだろう」¹⁷⁾と言及しているとおり、東仁文学の中には初期から多様な死が表れている。金東仁の「短編75編」は大体死のモチーフを使っており、その中で「死と直接関連している作品は28編である。」¹⁸⁾という文章から分かるように、東仁の文学における死は作品の展開の軸であり、作品に及んでいる影響は大きいと見られる。金東仁の「初期短編小説

15) この論文は、谷崎文学と韓国文学との比較のために吉美顕(2002)「大正期における谷崎の中性美への具現―「金色の死」を中心に―」『日本文化学報』第12輯、韓国日本文化学会、pp.151-161の内容をまとめて加筆した。

16) 金東仁の作品「ベタラギ」「馬齢」「狂炎ソナタ」の日本語訳は筆者による。

17) 尹弘老(1975)「東仁の中の死の意味」『東洋学』東洋学研究、p.249

18) 安美栄(1997)「金東仁小説の死の様相研究」淑明女子大学校教育大学院、修士論文、p.1

(~1925)では結末の大部分は死で処理している」、また「死」を叙事構造の重要な転換点¹⁹⁾として扱っている金東仁の作品を分析・検討したならば、金東仁の作品における死の意味はもちろん、文学史的意義についても把握できるだろう。

東仁文学における死は、女性と男性の場合、それぞれ異なっている。女性の場合は、嫉妬や時代環境、性に対する道德観や倫理観によって発生する死である。ここで注目すべきは金東仁の初期作品には男性より女性の死が多く扱われているということである。男性の場合は、芸術の誕生のためには、殺人も辞さないという「狂暴的な死」である。このような「狂暴的な死」の世界が顕著に現れている作品は、1930年に発表された「狂炎ソナタ」「中外日報」である。RWB. Lewisは「20世紀の文学」について「死の考察から始まっており、現世紀の文学世代が識別できるいい方法は死の事実に対応²⁰⁾することである」と言及している。したがって、「狂炎ソナタ」に現れている死の問題は、どのように機能して、どのような美学が派生されたのかについて把握することが重要である。

韓国文学における死について多くの関心を引き起こしたのは1920年代からである。その理由は死を通じて、植民地時代の国民の心を反映するためである。当時、作家たちの死の描写は、作家自身の意識表出でもあるが、時代の社会環境の反映がより大きいと言える。死を通じての「小説史的接近や作家の究明は70年代初まで全然しておらず²¹⁾」、最初に小説に表れている死の問題を扱った研究は、李在鉄の「現代小説とTanatopsisの問題²²⁾」である。彼は20年代の小説に現れているいくつかの死の事例を通じて「当時の社会背景と関連して死の顕著性を客観的²³⁾」に論じている。単行本として本格的に死について研究したのは、李仁福(1980)の『韓国文学に現出する死の意識と史的研究』(ヨルハダン：열화당)が取り上げられる。

金東仁の20年代の作品「ベタラギ」(1921)「専制者」(1921)「娘の業を受け継ごう」(1921)「荒い地」(1924)「馬齡」(1925)「明文」(1925)などには、李在鉄が指摘したとおりに、死というのは時代の反映であり、その死は社会の状況を表す手段であった。また、東仁の作品に描かれている死は、性と密接に関係しているところが特徴である。特に、東仁の作品でのヒロイン

19) 梁民恵(2006)『金東仁小説の死の研究』修士論文忠北大学教育大学院、p.2

20) 李存鉄(1981)「韓国現代小説史」ふんそん社、p.248 再引用。

21) 兪金浩(1988)「韓国現代小説に表れている死の研究」-李光洙・金東仁・廉想渉・玄慎健の小説を中心に- 博士論文、慶熙大学大学院、p.8

22) 李存鉄(1975)「現代小説とTanatopsisの問題」『韓国短編小説研究』イルチョカク

23) 兪金浩(1988)「韓国現代小説に表れている死の研究」-李光洙・金東仁・廉想渉・玄慎健の小説を中心に- 博士学位論文慶熙大学大学院、p.8

は、儒教性の強い女性として登場するが、性の葛藤から死の問題が台頭されている。彼女らは、その性について倫理的、道徳的に罪を問われ、自殺したり殺されたりするのである。このように、東仁は死という素材を作品の中で重要な機能として活用しており、女性の性と「死」の問題を深い次元且つ高度な手法で描いている作家と見られる。

「ベタラギ」では、男の主人公「彼」は妻に対する嫉妬が強い。その理由は妻が漁村に住んでいるにもかかわらず肌が白く、美しく、性格も明るくて誰ともよく話すからである。「彼」は顔が白くて逞しい弟さえにも嫉妬を感じている。ある日、「彼」は市場に行って家に戻ったところ、妻のスカートは下ろされており、髪の毛も乱れている場面から弟と妻が不倫していると思い込む。その誤解から「彼」は妻に暴行を振るい、家から追い出す。以前に二人は夫婦喧嘩をして、妻を家から追い出すが、別の部屋から弟と妻が笑っている声が聞こえて、「彼」は妻と弟を殺そうとして包丁を持って部屋のドアを開ける。ところが、「彼」は外で自分の行動を心配しているかのように見つめている妻を見かける。その後、「彼」は妻と愛を交わす。「彼」のこのような行動は妻の美しさと他者に愛嬌のある行動への嫉妬に起因している。

「ベタラギ」が書かれていた当時は、旧時代の儒教的倫理観と道徳観念が支配的であったため女性の性に対する見方は厳しいものであった。妻は自らの貞操について夫から誤解を受けたことをこの上ない恥辱とする道徳観念に囚われ、海で自殺する。妻は、死だけが「彼」の欲望を満たせる手段と考え、自殺を選んだと見られる。つまり、「他者の欲望に自分自身の欲望を満たせた」²⁴⁾とも言える。また、嫉妬の強い人物に反意を示すべく死を選んだと見做すこともできる。「彼」は、妻と弟との不倫について自分の誤解だと気づき、妻のことが愛おしく「ベタラギ」という歌を歌いながら海辺を歩く。妻の自殺の原因は、夫の強烈な嫉妬と妻自身の強圧的であった当時の儒教的精神に因り、自分の潔白を証明する行為を督励する当時の社会観念が反映している。妻の死によって、「彼」の欲望は全く異なるものになり、それは「彼」の人生の転換の契機になるのである。

金東仁は「ベタラギ」の後、貧乏と性を媒介にして死を描写した「馬齡」(「朝鮮文壇」4号、1925・1)を発表する。「馬齡」で描かれている貧乏は、植民地時代の農民収奪による政策から発生したものであり、このような政策の結果女性たちは生活のために体を売ることになる。

「馬齡」で女主人公福女の身分は農民であるが、彼女の父はとても貧乏だったので、彼女をW80(80원)(当時の価格)で売る。彼女の80オンの結婚相手は福女より20歳の年上で、福女

24) 梁民恵(2006)『金東仁の小説の死の研究』修士論文忠北大学教育大学院、p.12

の家よりもっと貧しい貧困の村(貧民窟)に住んでいる²⁵⁾。

この小説では、福女の父と夫は怠け者で、どちらの家も経済的に貧しい家庭として設定されている。このような状況の中で福女は生きるために、虫を取る仕事をするが、男性と関係を結ぶようになり、性の関係によって金持ちになる。彼女は「仕事もせずにお金をもっと稼ぎ、緊張の快樂もあり、虫を取って食べていくことより品があり、—(中略)—これこそが人生の秘訣じゃないだろうか。」²⁶⁾と思うくらい売春を楽しんでいる。福女は売春のことで「一人前の人間になっているような自信」さえ感じる。当時は儒教の社会で、女性は受動的であるが、性の快樂が分かるようになった福女は能動的に変化していく。ここで能動的というのは彼女が妖婦的な女に変わるということである。福女のこのような変化については、福女の貧乏による道徳な墮落であると理解しているのが普遍的であるが、「自己愛を實現して得られる快樂」²⁷⁾である」と言及している研究者もいる。

彼女の売春が可能であったのは、他者(夫)の欲望に自分の欲望を従属させたからであり、夫が福女の売春について知りながらも黙認しているのは金で自分の欲望を満たしたいからである。福女は畑で馬齡を盗もうとしているところを、王という男に見つかり、その男と関係を結び、W3(3원)をもらう。二人はどんどん親密な関係になるが、王という男が若い女を金で買って結婚することになる。ここから「馬齡」は新しい展開を迎える。結局、福女は王と性関係から発生する衝動的な心理の嫉妬によって、王を殺そうとしていたが、逆に王に殺される。夫は王と謀って福女の父のように振る舞い、福女の死体を売る。

福女の死は自分自身にある欲望からくる嫉妬によるものであり、父と夫の経済的な欲望に従属していると見てもいいだろう。福女は売春までして他者の欲望を満たすが、自分の欲望は満たせないまま死に至るのである。

このように、金東仁の初期作品に反映されている死の共通点は現実社会の反映であり、性と関係のある嫉妬によるものである。また、男主人公の死よりは、女の死を多く扱ったことにもうひとつの共通点がある。ところが、福女の死は「ベタラギ」の妻の死と異なる点がある。それは、福女の死は他者に影響がなく、ただ彼女の死そのものが金に換算されただけである。

25) 「七星門の外をひとつの村を考え、そこに集まっているすべての人たちの本業は乞食である。副業では泥棒と(自分たち同士)人身売買、その他にこの世のすべて怖く汚い罪惡だらけである。福女もその本業を始めた。」金東仁(1987)『馬齡』『金東仁全集』1、朝鮮日報社、p.348

26) 金東仁(1987)『馬齡』『金東仁全集』1、朝鮮日報社、p.350

27) リュジョン(2002)『1920年代の小説に表れている貧乏と死の問題』-「馬齡」「ファスブン」「運の良い日」を中心に-『韓国学研究』第16集、高麗大学韓国学研究所、p.170

3.2 「狂炎ソナタ」における悪魔的な死

金東仁は1930年代に入ってから、死における美学の様相の変化を求めている。その代表的な作品は、「狂炎ソナタ」である。「狂炎ソナタ」では、芸術の誕生のための戦慄、狂気という死が登場する。

この小説は、音楽批評家Kと社会の教化者が語っている場面から始まり、二人の話題の軸は「機会」という言葉である。音楽批評家Kはある天才に「機会」が与えられなければ永遠にその天才性は現れないが、もし天才に「機会」が与えられて天才性が引き出されたらその「機会」を呪うべきなのか、「祝福すべき」なのかというくらい天才にとって「機会」は看過できないと言っている。音楽批評家Kが「機会」を重要視しているのは、この「機会」が天才に内在している悪を刺激して、力のある音楽が誕生するからであり、「狂炎ソナタ」ではこの「機会」は犯罪とつながって天才的な音楽が生まれるのである²⁸⁾。

音楽批評家Kと白性洙との出会いは、教会である。音楽批評家Kは、教会で瞑想や作曲をしていたある日、騒がしい人の声や騒音が聞こえて外を見た時に、ある家から火が燃え出ていることに気づく。彼はその燃えている火を見て、妙に興奮する。

火が飛んでいく様子、その中にどんどん黒くなっていく柱、家にある死体、人のしゃべっている声、このようなことについて考えてみると、これは詩にもなれるし、音楽にもなるだろうと思っていた。昔ネロはローマに火が燃えていることをみて、琵琶をもって歌を歌ったというのは、音楽家の視点からみるとそんなにおかしいことではない。

音楽批評家Kは上のように考えているとき、急に教会に飛び込んでくる人がいる。その人は白性洙である。白性洙は教会の中においてあるピアノを見つけ、Cシャープの短音階のアレグロを弾く。そのピアノの音は「野生的」であり、技巧がなく、力のあるものである。音楽批評家Kはこのような曲は、生まれて初めてだったので、微動もできないまま聞いているだけである。また、彼はそのピアノの底辺から「緩徐調の圧縮された感情の狂暴、さらに快味、哄笑」まで感じられた。これだけではなく、彼は、その曲から「圧縮された感情、猛烈な火、人の切なさ、狂暴性による「まだ文明」という恩恵に一度も経験のない野人」

28) 天才的な音楽家白性洙はある家に火をつける「機会」が与えられる。その「機会」をきっかけにして、白性洙は狂ったような狂的な音楽を誕生させる。このような場合は「機会」というのは、本当に犯罪なのかどうかについて音楽批評家Kは社会の教化者に語るのである。

を思い出した。この曲から音楽批評家Kは、30年前に心臓麻痺でなくなった「白00」のことが思い出された。

音楽批評家Kはピアノを弾いている青年に近づいていき、いろいろ聞く。彼はその青年が30年前になくなった友達の「白00」の息子であることに気づく。音楽批評家Kは白性洙を家に連れていって、教会で弾いていた曲を完成させようといういろいろ教える。ところが、音楽批評家Kは白性洙が何度もピアノを弾いても、その音からは野性、力、鬼気は一向に感じられない。彼は、仕方がなく、先ほど教会で書き移していた楽譜で演奏すると白性洙は興奮し、狂ったようにピアノを弾き始める²⁹⁾。

白性洙の野生的であり、狂暴的な音楽は母の復讐心や葛藤から派生している。白性洙の母は妊娠して実家から追い出されて行商をする。白性洙の母は貧乏な生活を送りながらも彼にいつも子守唄としてシューベルトやドレンドの「二番目のワルツ」を聞かせたり、オルガンを買ってあげたりする。

ところが、白性洙は金のことで人生の転換期を迎える。これとともにこの小説は展開が変わっていく。白性洙は音楽の勉強のために集めていたお金を母の病院代で全部使ってしまう、人のお金を盗む。この事件で、彼は六ヶ月くらい監獄で過ごす、彼が出所しても、母は既に亡くなり、お墓もどこにあるのかわからないくらい悲惨な状況であった。

白性洙は自分自身を悲惨な状況に陥れた店の主人に復讐を決意する。彼は店の主人の家の前に積んである稲に火をつけ、その火が店の主人の家に広がっていくことに気づき、急に怖くなって逃げるが、逃げたところは教会である。火事の件はこのような機会が白性洙の内面に内在している悪を刺激し、彼自身の葛藤から発生したものである。金東仁の文学は「葛藤を最大限に重視して扱っている」³⁰⁾と言える。

「狂炎ソナタ」では、葛藤による最高の絶頂は死である。白性洙は自分自身が刑務所に行っている間、母の悲惨な死について話を聞く。母の死によって白性洙の葛藤は最高潮に至り、結局、彼は葛藤と復讐という感情によって、店の主人の家に火をつける。葛藤は怒りの核心になり、その怒りは死という問題とも繋がる。母の死を契機として、白性洙の葛藤が生まれ、この「葛藤」は火をつけるという機会を得て天才的な芸術を生み出すのである。

白性洙は、野生的で狂暴的なピアノ曲を作ろうとするが、なかなかできずに落ち込んで

29) 「Cシャープ段音階」の狂暴な「ソナタ」はまた始まりました。暴風雨のように、また怖い波のように人の息が詰まるような力—それはベートベン以来近代の音楽家からは見たこともない野性があります。」

30) 柳スキョン(1997)「金東仁の短編小説に現れている死に対する考察」『国語教育研究』9、p.158

いる。彼は散歩がてら道を歩いている時、偶然に道端にある稲わらを見て、「敵にぼったり会って緊張し、興奮する」ようになり、その勢いで稲わらに火をつける。その燃えている火を見て、「怒っている波」という曲を作る。音楽批評家Kの鑑賞は次の通りである。

‘アダジオ’から始まるが、静かで、穏やかな海、水平線の向こう側に越えていく太陽、このように穏やかなものがどんどん‘スケルチョ’に入ってからにはわか雨、暴風、雷、怖い風の音、転覆される船、疲れて海に落ちる雁、ひっくり返されて津波に押し流されていく町の人々の叫び声、興奮から興奮、狂暴から狂暴、野性から野性、総て恐怖と暴虐な光景が目に見え、このような年寄りである私が興奮に耐えられなくて、“やめてくれ”と叫び越えた。－(中略)－
‘怒っている波’という題名の下はもう音譜になっている。

彼は力のある曲のために何回か火をつける。このように、野生的で狂暴的な曲は日が経つにつれてどんどん力がなくなる。その理由は、白性洙を興奮させる要素がなくなったからである。ところが、ある日白性洙は道に転がっている死体から「血の旋律」という曲を作る。彼は道に転がっている死体の上に乗る、その死体の衣を破って投げ出し、裸になった死体を持ち上げて投げやる。白性洙が死体をあまりにも乱暴に弄んだので、死体は頭が壊れ、腹が敗れて触るところがなくなる。そのような状態の遺体を見た彼は興奮し、ピアノを弾く。それが「血の旋律」である。この曲の次は「死霊」で、これも「血の旋律」と同じく死体からできあがった曲である。

私にはその女が亡くなったのは思いもつかないことであります。私は、あの日、ひそかにそのお墓に行きました。それから7・8日の前に被らせた土を掘って、その遺体を引き出しました。碧い月の光の下に置かれている美しい彼女の姿は果たして善女のようにあります。軽く目を閉じている青白い顔、まっすぐな鼻筋、乱れている黒い髪、無表情である穏やかな顔の切なさはいくらも目立っている。これを見つめていた私は急に興奮して－(後略)－

これは白性洙が音楽批評家Kに送った手紙の内容である。白性洙は上の引用文のように遺体から感じたことを曲にしている。ここではボードレール(Charles-Pierre Baudelaire)が求めている「悪の美」(Les Fleurs du Mal, 1857)が感じられる。また、悪魔的な美は、金東仁はその文学世界に強く影響を与えた谷崎から、谷崎はボードレールから強く影響を受けたことは確かである³¹⁾。兪金浩は「新小説の中では多くの暴力と<死>が直接、または間接的に散

31) 吉美顕(2007)『谷崎における女性美の変遷-西洋文学との関係を中心として-』花書院、pp.27-32 参照。

在している」、「暴力と憎悪、殺意などの物理的暴力が新小説には非常に顕著に登場して日常的な関係に現れている」³²⁾と言っているように、金東仁の文学には「暴力と憎悪」と悪魔的な要素つまり、悪魔的な死が現れている。

白性洙における音楽の創造性においては、性と死の関係は看過できない。白性洙は音楽の生成のためには殺人や死姦までも厭わない。金東仁は死と性の関係を初期作品から積極的に扱っているが、初期作品「ベタラギ」と「馬齡」では性による死であり「狂炎ソタナ」はそれより更に極まった殺人や死姦における死である。このように「死、放火、屍姦、殺人」という機会が白性洙に内在している葛藤を刺激して類のない力のある音楽を生み出す。つまり、これらを通じて、野生・狂暴的な芸術を完成することができるのである。

音楽批評家Kは 白性洙の音楽を高く評価し、音楽協会の人間と一緒に政府に嘆願書を出し、白性洙の死刑を阻止し、精神病院に送るように根回しする。彼は白性洙の天才的な音楽性、「力のある音楽」を創出するためには、殺人や放火、屍姦を犯しても致し方ないものとする。

「私たちの芸術家の見解からはこのように考えることもできます。ベートーベン以降からは音楽というのは、力が抜けて花や女を賛美し、恋愛を賞賛するものばかりであり、線が太い音楽は見ることができません。－(中略)－力のある芸術、線の太い芸術、野生で溢れている芸術－私たちは、これを待ち焦がれていました。白性洙が現れました。白性洙の音楽のひとつひとつがすべて私たちの文化を永久に光らせる宝玉です」。

音楽批評家Kは引用文のように、千年、万年ぶりに生まれるか生まれないかの天才を微々たる犯罪でこの世から無くすことそのものが罪であると考えている。彼は葛藤、憎悪「機会」から発生している「狂暴的な音楽」と「力のある音楽」はこの世ではめったに聞くことができないため犯罪の問題を審美化しているとし、その犯罪を弁護している³³⁾。

この小説では「機会」という言葉が展開の軸になっている。それは、この小説の冒頭の部分でも「機会」、最後の部分でも「機会」と言う言葉で終わっていることから分かる。尹弘老が「東仁は日常的なものは耐え切れなく、刺激的な緊張感をどこでも喚起させる極限的な

32) 俞金浩(1988)『韓国現代小説に現れている死の研究-李光洙・金東仁・廉想渉・玄鎮健の小説を中心に-』慶熙大学大学院、博士学位論文、p.32

33) 音楽批評家Kは社会の教化者に「機会」によって人の持っている天才性とともに、「『犯罪本能』まで引き出したならば」私たちは「その機会を呪うべきでしょうか。あるいは祝福すべきでしょうか」と問いかけている。

舞台の設定の名手である」³⁴⁾と述べるように、金東仁は「極限的な舞台」の設定のために「機会」という言葉を使っている。この「機会」というのは言い換えれば葛藤とも言える。「狂炎ソナタ」における「機会」は葛藤であり、この葛藤は死と繋がり、天才的な音楽が生まれる。李仁福はこの点について、「東仁の死には主題としての死はなく、事件の進行及び話の構成上に必要な素材としての死が利用されているだけである。」³⁵⁾と言及しているが、「狂炎ソナタ」では死の問題を看過できない。それは、死というのはこの作品では芸術の誕生のためには不可欠な要素であり、小説の構造の中での重要な機能を担っているからである。

4. 終わりに

本稿では、死を通じて「金色の死」と「狂炎ソナタ」に現れている芸術と美学とは何かという点について分析してみた。

「金色の死」と「狂炎ソナタ」における共通点は語り手によって美学が語られているということである。「金色の死」は友達である岡村が「私」が迫及した美の展開について、「狂炎ソナタ」では、音楽批評家Kが白性洙のデカダンス的な死による狂暴的な音楽の芸術性について代弁している。また、何より死による美学の追求という点はもうひとつの共通点であると見られる。

「金色の死」の場合は人間の肉体だけが美であると思っている岡村は、「人工樂園」の景観の中で自分の体に金箔を塗って、美の再現の時、窒息して死んでしまう。谷崎文学と言え、美しい女性を拝跪する男性の姿が描かれているが、「金色の死」では総ての美は富豪の美青年岡村によって独占されており、更に女性が登場しないのが特徴である。一人の女性に象徴された谷崎の独特な美の世界は、谷崎文学の基本的な概念だったのだが、「金色の死」の中では、富による美の実現の理論と実践だけが語られている。「金色の死」は人間の肉体だけが美であり、岡村にとって人間の肉体は、「刹那的な美」の具現と中性美の要求のための手段であった。

「狂炎ソナタ」の場合は、天才白性洙が力のある音楽の誕生のために、放火、死姦、殺人を犯す。両作品は死による芸術性の表現という点は類似しているが、そこに至る経緯や方

34) 尹弘老(1975)「東仁の中の死の意味」『東洋学』東洋学研究所、p.249

35) 李仁福(1981)「国文学に現れている死の意識の史的研究」ヨルヒヤダン、p.225

法は異なる。「狂炎ソナタ」では機会→葛藤→死である。言い換えれば火をつけて燃えている火を見て興奮し、道端にある死体を見て「葛藤」が起こり、その「葛藤」は抵抗(死)と繋がり、白性洙の野生的な音楽性が生まれる。この葛藤がますます激しくなり、白性洙は殺人を犯してまで狂暴的な音楽を作るのである。

金東仁の小説においても「死」という問題は初期作品に散在しており、特に1920年代の作品に顕著に表れている。1920年代当時は植民地時代であるため社会的問題を死を通じて表現した。ところが、1930年代の金東仁作品からは死の変貌が見え、死による美学が登場する。1930年代の作品「狂炎ソナタ」における死は社会状況の反映ではなく、美の誕生のための死の描写である。この作品の特徴は退廃的でデカダンス的な死を通じて野生、狂暴的な音楽が誕生するということである。また、このような音楽のためには殺人を犯すことも是認する芸術論である。

「金色の死」の岡村は人間の体、それも男の体を選択し、死による美学を作り上げ、「狂炎ソナタ」の白性洙は自分自身に与えられた「機会」と葛藤によって、死姦や殺人を通じて「力のある美」を誕生させる。このように両作家の美の世界は美学的な死を求めた結果、生まれたと思われる。

【参考文献】

テキスト

- 金東仁(1987)『金東仁全集』1、朝鮮日報社
 谷崎潤一郎(1981)『谷崎潤一郎全集』第2巻、中央公論社

単行本

- 金東仁(1987)『金東仁全集』1、朝鮮日報社、p.350
 金春美(1985)『金東仁研究』高大民族文化研究所、pp.97-179
 李仁福(1981)『国文学に現れている死の意識の史的研究』ヨルヒヤダン、p.225
 李存鉄(1981)『韓国現代小説史』ふんそん社、p.248
 吉美顕(2007)『谷崎における女性美の変遷-西洋文学との関係を中心として-』花書院、pp.27-32
 佐伯彰一(1979)『谷崎・芥川・三島物語芸術論』講談社、p.115
 清水良典(1990)『日本文学研究資料特集八 谷崎潤一郎物語りの方法』有精堂、p.91、p.94
 谷崎潤一郎(1981)『谷崎潤一郎全集』第一巻、中央公論社、p.63、p.359
 野口武彦(1973)『谷崎潤一郎論』中央公論社、p.70
 谷崎精二(1967)『明治の日本橋・潤一郎の手紙』新樹社、p.115
 三島由紀夫(1970)『作家論』中央公論社、p.68、p.69、p.72
 _____(1975)『三島由紀夫全集』第32巻、新潮社、p.9

雑誌

- 尹弘老(1975)「東仁の中の死の意味」『東洋学』東洋学研究所、p.249
- 柳スキョン(1997)「金東仁の短編小説に現れている死に対する考察」『国語教育研究』9、p.158
- リュジョン(2002)「1920年代の小説に表れている貧乏と死の問題」-「馬齡」「ファスブン」「運の良い日」を中心に-『韓国学研究』16、高麗大学韓国学研究所、p.170
- 吉美顕(1999)「谷崎潤一郎文学の韓国における受容(Ⅰ)-「刺青」と金東仁の「狂炎ソナタ」」『COMPARATIO』Vol.3、九州大学大学院文化研究科比較文化研究会、pp.28-44
- _____ (2000)「谷崎潤一郎文学の韓国における受容(Ⅱ)-谷崎の「刺青」「春琴抄」と金東仁の「狂画師」の女人像をめぐって」『COMPARATIO』Vol.4、九州大学大学院文化研究科比較文化研究会、pp.1-12
- _____ (2006)「李光朱「無情」における結婚観研究—漱石の「三四郎」における恋愛観の比較をめぐって—」『COMPARATIO』Vol.10、九州大学大学院比較社会文化研究科、pp.1-10

学位論文

- 俞金浩(1988)『韓国現代小説に現れている死の研究—李光洙・金東仁・廉想渉・玄鎮健の小説を中心に—』慶熙大学大学院、博士学位論文、p.8、p.32
- 安美栄(1997)「金東仁小説の死の様相研究」淑明女子大学校教育大学院、修士論文、p.1
- 梁民恵(2006)『金東仁の小説の死の研究』忠北大学教育大学院、修士論文、p.12、p.2

논문투고일 : 2017년 04월 01일
 심사개시일 : 2017년 04월 17일
 1차 수정일 : 2017년 05월 07일
 2차 수정일 : 2017년 05월 15일
 게재확정일 : 2017년 05월 16일

 <要旨>

韓・日男性作家の作品に表れている美学的な死(Ⅰ)

- 谷崎潤一郎と金東仁の作品を中心に -

吉美頭

本稿では金東仁文学と谷崎文学に現れている死の意味を把握することで、韓・日の男性作家の描く死における美学の要諦の相違点、ならびに共通点を「金色の死」と「狂炎ソナタ」を中心に検討してみるということを目的にした。

谷崎は初期には女体美を用い、強者としての美を描写した。ところが、彼は中期に入ってから美の追求のために死という要素を加える。「金色の死」で岡村は自分が作った「人工楽園」で生きている自分自身の体に金箔を塗って、刹那的な芸術を誕生させようとするが、結局、彼は窒息して死んでしまう。

金東仁の場合、初期の作品に表れている死は当時の社会の反映、儒教的な要素、嫉妬と貧乏による葛藤からのものであったが、1930年代の作品「狂炎ソナタ」には、退廃的でデカダンス的な死を通じた野生、狂暴的な音楽の誕生が、また、音楽のためには殺人を犯すことも是認する芸術論が描かれている。

両作品を分析した結果、死による美学の描写は共通点であるが、「金色の死」の岡村は人間の体、それも男の体を選択し、刹那的な死による中性美を作り上げ、「狂炎ソナタ」の白性朱は自分自身に与えられた「機会」と葛藤によって、死姦や殺人を通じて「力のある美」を誕生させた点は両作家において相違点であるとみられる。

The aesthetic death to be described in works by male writers
between Korea and Japan(1)

- Focusing on the works by Tanizaki Junichiro and by Kim Dong-In -

Gil, Mi-Hyun

The objective of article is to grasp the meanings of the death which is described in the literatures by male writers between Korea and Japan, by which I try to find the differences and something in common focusing on “Gold Color Death” and “Furious Flame Sonata” as the representatives

Tanizaki describes the beauty as something strong using female body beauty in an early stage. But, he adds an element of death for pursuit of beauty from middle term. In his work, “Gold Color Death”, Okamura tries to apply gold foil to his own living body at the “artificial heaven” to create a momentary art, but after all, he chokes and dies.

Kim Dong-In expresses the death as being generated from a social reflection of those days, Confucian factor and the conflict by jealousy and poverty in an early stage. But in a 1930's work, “Furious Flame Sonata”, he draws the birth of wild-furious music through corrupted and decadent death. Furthermore, he approves that the murder could be committed to produce creative music.

From analyzing the above two works, we can understand that there is something in common to describing the aesthetics of death between two male writers, but a difference in that Okamura in “Gold Color Death” shows “a neutral beauty of death” and Back Sung-Soo in “Furious Flame Sonata” creates “strong beauty of death”